

札幌市立真駒内曙中学校の取組

(学校ホームページ <http://www.makomanaiakebono-j.sapporo-c.ed.jp/>)

1. 学校の実態・地域性等

第 11 回札幌冬季オリンピックの運営本部として建設された建物を改修して、本校は開校した。冬季オリンピックとかかわりの深い本校では、かつて、スケートやスキー授業、雪中運動会など雪と親しむ行事も数多く実施されていた。

近隣には、オリンピック会場として利用された真駒内屋外競技場・屋外競技場や藻岩山スキー場があり、生徒はいつでも冬季スポーツに親しむことができる環境の中で生活をしている。

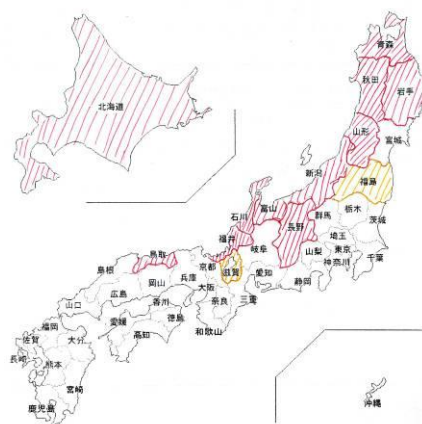
2. 実践 1

(1) 単元名

1 年 社会科 「雪国の生活・産業の工夫」 (3 時間扱い)

(2) 目標

- ・ 日本の降雪地帯など雪に関する基本的な知識を確認する。
- ・ 雪が農産物の貯蔵、冷房としての利用、地域おこしの材料などに有効利用されていることに気づく。

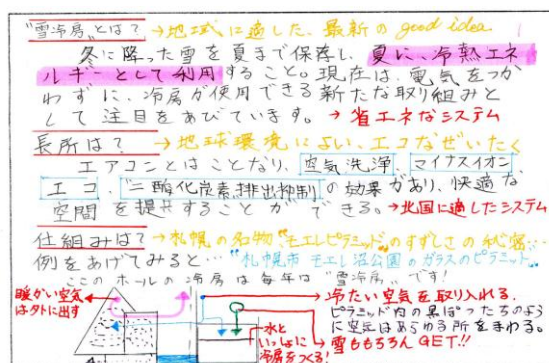


(3) 取組の様子

日本の降雪地域について確認する場面では、北海道・東北・北陸地方の降雪量が多いことに気づくとともに、鳥取県で年間 200cm、滋賀県で年間 100cm を越える降雪量があることに新鮮な驚きを得たようである。

「北海道の冬の魅力・自慢」については、雪に対するプラスイメージが強く、ウィンタースポーツや観光資源としての魅力をあげる生徒が多かった。

利雪の面から調べさせた「雪室」「越冬野菜」「雪冷房」については、知らない生徒が多く、インターネット等を使って調べたことを絵図等を用いて工夫してまとめることができた。また、雪を新しいエネルギーとして有効利用する動きがあることを知ることもできた。



3. 実践 2

(1) 活動名

1 年 「落ち葉堆肥をつくらう」

(2) 目標

- ・ 落ち葉から堆肥を作り、土に戻すことで、敷地内あるいは地域の中で資源の循環システムを構築する。
- ・ 落ち葉が腐敗・発酵し、腐葉土化するしくみを理解する。

(3) 取組の様子

① はじめに

緑あふれる本校の敷地内には、毎年、地面を覆い尽くすほどの大量の落ち葉が生まれる。それらの落ち葉は多くの労力を費やして回収し、焼却処分してきた。落ち葉の堆肥は植物の良好な栄養になるとともに、ごみを減らし、二酸化炭素の排出抑制にもつながると考えた。

② 落ち葉集め

ボランティアを募り、11月から落ち葉の回収を始めた。毎日毎日、降り注ぐ落ち葉の量とその重さに生徒も圧倒された。



③ 堆肥ボックスづくり

校舎裏に落ち葉を堆肥化するための場所(穴)を作る。大きさは2m×4m四方、深さ80cmのものを1カ所準備したが足りずに、2カ所準備した。



④ 堆肥づくり

落ち葉に米ぬかを混ぜ、薄く土をかぶせたものを何層かに重ねた。その上をブルーシートで覆って作業を終えた。

⑤ 切り返し

12月末に雪をかき分け、切り返しを行った。定期的に積んである落ち葉の上下をひっくり返して空気を入れ替える作業を行った。積雪時の地中温度は+3℃前後、湿度98%で安定しており、腐葉土化が進んでいると推測される。



4. 研究のまとめ

本校は平成19年度に「さっぽろフードリサイクル重点校」に指定されて以来、総合的な学習の時間を中心に、生活にもっとも身近な「食」を通して環境問題について様々な取組を行ってきた。

今回の「落ち葉堆肥づくり」もその一環としての取組と位置づけており、まだその入口にさしかかった段階に過ぎない。今後の取組としては、落ち葉を腐葉土化し、その腐葉土を使って農作物を作り、収穫した野菜を雪室で貯蔵・利用すること等を計画している。

多くの労力を必要とするこの取組を継続するためには、手間を省く工夫が必要になってくることが予想される。また、学校だけの取組に終わることなく、家庭や地域にも還元できるような取組を考えていかなければならない。

多くの札幌市民にとって雪は重荷であり、除排雪を強いるとともに、交通等への障害を引き起こし、経済的な負担増など生活に多くの悪影響を及ぼすものと捉えられており、生徒も同様に認識していた。

そのような雪についてプラス志向でとらえられるような活動を今後も継続していきたい。